明治初期の富山県におけるコレラの流行について

富山県農村医学研究会
豊 田 文 一

私の友人、柴田弘之君から明治初期の医療に関する古い資料を提供され、何か役立つことがあれば幸いであると話された。資料は同家に保存されているもので、同村の祖先が、当時、石川県新発田市でコレラ流行があった戸田村に就任したときに開業していたものである。この資料はコレラ流行に関するもので、一覧すると当時の視察、医療の一端を考察するものと思う、そのうち興味あるものを抜粋し、ここに記述する。

なお提供された資料は、明治10年（1877）、12年（1879）のもので、すべて和紙のため、

<table>
<thead>
<tr>
<th>コレラバッドミー</th>
<th>始まった年</th>
<th>日本における流行</th>
<th>富山県における流行</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>始まった年</td>
<td>患者数</td>
<td>死者数</td>
</tr>
<tr>
<td>第１回</td>
<td>1817</td>
<td>1822（文政5）</td>
<td>数万人</td>
<td>多数</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>朝鮮帰来</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>2</td>
<td>1829</td>
<td>1852</td>
<td>1856（安政5）</td>
<td>数十万人</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>明治10</td>
<td>1877</td>
<td>13,710</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>中国帰来</td>
<td>1879</td>
<td>162,637</td>
</tr>
<tr>
<td>4</td>
<td>1883</td>
<td>1881</td>
<td>1881（明治14）</td>
<td>9,328</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>（明治15）</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1885（明治18）</td>
<td>51,631</td>
<td>33,784</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1886（明治19）</td>
<td>13,772</td>
<td>9,310</td>
</tr>
<tr>
<td>5</td>
<td>1889</td>
<td>1890（明治23）</td>
<td>155,923</td>
<td>108,405</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>（明治24）</td>
<td>47,019</td>
<td>35,227</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1895（明治28）</td>
<td>11,142</td>
<td>7,760</td>
</tr>
<tr>
<td>6</td>
<td>1899</td>
<td>1902（明治35）</td>
<td>13,362</td>
<td>9,226</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1907（明治40）</td>
<td>3,632</td>
<td>2,526</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1916（大正5）</td>
<td>10,371</td>
<td>6,260</td>
</tr>
<tr>
<td>7</td>
<td>1920</td>
<td>1919（大正6）</td>
<td>2,912</td>
<td>915</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1929（昭和4）</td>
<td>4,985</td>
<td>3,121</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1937（昭和12）</td>
<td>205</td>
<td>116</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1945（昭和20）</td>
<td>57</td>
<td>11</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td></td>
<td>1956（昭和21）</td>
<td>1,245</td>
<td>560</td>
</tr>
<tr>
<td>1961</td>
<td>1963（昭和38）</td>
<td>1</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1964（昭和39）</td>
<td>3</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1977（昭和50）</td>
<td>110</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1978（昭和53）</td>
<td>70</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>1979（昭和54）</td>
<td>28</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

— 171 —
なかには紙魚に食われ、判読不能のものもあった。ただ通覧するに農村に居住されコレラの治療防病に尽瘁された医師の姿をうかがいた知ることができた。ここで得られた資料を紹介するに日本におけるコレラ流行の経緯について表示することとする。これはインド、フランス、三角州より1871年に端を発し、日本では文政5年（1822）の記録が始めてのである。その後、その流行に対して手をこまね

政府は明治8年3月、大政官布告をもって虎列刺、天然痘などの伝染病を診察した際に出すことを規定し、同10年8月には、この年全国的に多発した虎列刺に対処して「虎列刺予防心得」を定め、数回にわたり改正を加え、その都度民を相談する手続をはかってきた。しかし12年5月各地に発生した虎列刺は従来の予防措置を上回る勢いをもって全国各府県に流行し、止まる所を知る有様となった。この状況に驚き、大政官布告第28号をもって「海港虎列刺病伝染予防規則」を定め12年9月にはさらに規定した「虎列刺予防心得」に法的規制力を加えた「虎列刺予防仮規則」を公布した。

えられた布達は、明治10年6月18日、石川県奉行官代理大書記官熊野九郎より死亡診断書の届出の義務づけであり、国郡名、地名、職業、氏名、戸主の相続、年令、病名、手続月日、死亡を届出することが規定された。明治10年10月1日、甲49番

過日鹿児島県下暴動鎮定ニ付該地方出兵各軍道々引撃可相成ニテハ帰路沿道ノ地方当時虎列刺病感染ノ憂有之趣椙条当管内ノモノニシテ右軍指揮ノ者ハ自家到着ノ上ハ一層該病予防方法注意ヲシ各自着療其他携品モノ迅速消毒薬ヲ撤布可致ヲ又軍隊帰路宿泊所ヲ於テ先其内及び夜具類便所等モノ消毒薬ヲ撤布可申共管内布達候事

石川県奉行　相山純孝

上記は西南の役に出動した兵士、その頃富山県（当時石川県）は名古屋鎮台の管轄にあり、事變終結後の復員者に対する防病の布達である。前記の表にあるように10年の流行は中国（清国）と推定されていることより、九州、中国などに蔓延し、兵士はその地域を通じたためよくその侵害を防止する布達であったろう。その年は富山県には発生していない。

これより先10年8月24日、内務省衛生局告第5号コレラ発生の予防についての方法を布告している。これを摘録すれば、

虎列刺病ノ流行スルヤ其勢速進速進ニシテ殆ど何ヲ掩フニ及バザルモノアリ其時ニ当リテハ官庁ヲ予防救急ニ注意アルベシト難モ心得置キ深ヲ戒慎スルニ非レハ於共一身ヲ非命ニ殲スニ止ラズ必ス其ノ惨痛ヲ他人ニ延転シテ庶民ヲ知ラザルニ至ルベシ因テ今方法ヲ記シ左ヲ報告ス

コレラ病流行之節各自に注意すべき

養生法、附著衛生方法

コレラ病は同じくその病に於ける人及び病者に感染するものに非らずんよりの発病の外更にその中の中に於て感染するものあり始め病を発するものならして飲食病殊に下痢に催るものは最も危険かつ常住坐臥を同じす

人にて毎日に腸胃の健康なるものには感染すること稀にして虚弱なる人に多きが故に其流行の際にしても別に飲食を節制し労働を慎みて飲食機を健全にし腸胃食傷等をなさる様に用意をなし若し軽い下痢はそれにの他の食詰機を発するることあるれば速かに医師につき大切に養生すべし食物は一つ一つの品を定めて良否を判断するよりは其の調理と節約とに注意すること肝要となりとす如何なる食品にても食物を食

成り或多食するときは下痢その他の腸胃病を発して発発を招き或は発染するものあり他者各人の慣習に因って常に下痢を発せる物は同様の害あらば決して用ふべきにあらず著其用ふべき食料には穀物及び牛犛羊鶏の最上とす家鶏雁豚の肉は脂肪多くして宜し
からず又魚介は厳禁するといふことにより又海辺にて常食となす故に之が為に差支を生すべし到底新鮮なる者は差して禁ずるに及ばず野菜は薙は拾って馬鈴薯の如き澱粉を含む根類を食すべし魚介疏菜は勿論総て何品にて煮蒸が災とせぬ調理を経させるに非らざれば用ふべからず又成熟せる果実。桃。李。梨。橘。葡萄。薬の類を少許ずつ食するば害なきと雖も不熟のものは必ず之を忌むべし

飲水は不増減成は疑しきものは忌むべし凡そ此際於て何れの水をも皆不潔なるものと定め煮沸して後用うるを良しとす。（中略）

吐瀉物洗滌法

コレラ病者ある家において消毒の法を行うには委員並に医師の教示を受くべしと雖も今以後の為に吐瀉物を除む方法を示すべし抑をコレラ病の伝染毒は其吐瀉物に舎どれるものなるが故に特に其の除むに注意すべし即ち家邦人の習慣としては断ずる病の舎どれ吐瀉物にても或は之を河川に投じ或は之を下水に投すれば其病気は既に消滅すると誤り認めても其水は流れて播播し、地中に浸潤し井戸にまで浸透を重ね伝えに至るを知らざるもの多し（中略）吐瀉物は石炭酸水（1分の結晶石炭酸を百倍の水に溶かしたもの）を以て徹し又此水に半量の浄水を加えて顔を洗び次に石鹸にて洗浌すべし吐瀉物を受給はこの薬を溶け水、洗浄物、吐瀉物は袋に温の水べかまずと捜しつつ何許分に分ければ住家及び井戸をすてべし六間半余の地にてて深く其土を掘りて之を埋め或は焼しつくべし（以下略）

以上内務省衛生局より各府県に通達した注意書であるが、當時有効な薬剤もなく全国的に蔓延するコレラに対し打つ手もほとんどなかったように思われ自然消散を至らなかったと思われる。なお日は流行時その消毒薬の高騰の取締の布達である。
モノアルヘシ
明治十二年八月十三日
石川県岩波郡長・石川兵藏
この明治12年のコレラは富山県（石川県を含めて）流行史上極めて大であり、医師のなか
に患者の診療拒否するものもいたので、かかる
布達が出されたものと思われ、当世を顧みて
感慨新たなものがある。
しかし富山県にコレラの侵入したのは安政
5年（1858）で諸方で蘭学を学び、魚津に
帰った阿波加修造の著書「師路便乗」（コレ
リセイイゴ）には魚津で662名コレラに罹患し
うち531名が死亡したと記録されている。コレ
ラは罹患後10日経過してコレラ又死亡する
ので当時はこの名称が用いられていたものと
思う。
私の記憶を辿ると大正6年の流行時、富山
市において発生、その夏、父に連れられ小川
温泉にむかいる来駅にて下車した所、改札口に
巡査がおり、乗車券を当該駅をみて、駅より
外へ出ることを拒ばれ止むなく引き返され
ざるをえない思い辛い思いが蘇る。その家は角
町、隣の八人町に患者発生、道路には縄をはり
巡査が出入を禁止していた。コレラに対する小学校時代の恐怖は今でも追憶の
念新たなるものがある。
なおその翌年明治13年に福井県においてコ
レラが発生し、その流行防止のため石川県令
より布達が発せられている。
役第二百八十三号
越前国福井相生町平民戸田宗七男者一昨
二十四日午後四時真性虎列刺病ニ罹り同第
六時死亡候旨其向ヨリ通牒ヲ機トシ就而ハ
各地方へ病毒依存可致候モ難計候故此際各
医業ノ者者諸病毒依存可致候モ難計候故此際
各医業ノ者者諸病診察之節留意シ万一一疫病
ノ者有之候ハバ直ニ可届出ハ勿論ト難トモ
若届出方猶豫スル中ハ豫防並消毒方手後レ
ト相成為メニ病毒一時ニ蔓延シ其増毒ハ昨
年ノ如き取リカへスヘカラサル場合ニ立到
リ候聴不相済次第ニ候条自今ווה症病類似病
又ハ向候疑症、吐瀉病ニ至候マテ診察候ハバ
即時可届出様各医業者へ通知可致此旨相達
候事
明治十三年四月廿六日
警五番
医務取締
明治十二年三月丙午四十四番ヲ以変死傷ノ者
検視ノ節所轄警察署ヨリ医者覆没ノ義ニ付
出頭方相達候処自今警察署ニ於テ同様
検視執行可致候條通達次第ニ出頭シ用
弁不差支孫醫業ノ者へ可相達此旨相達候事
明治十三年四月廿七日
石川県令 千崎高雅
以上の布達は医務取締を通じて開業してい
る医師へ相達させたものらしく、他の書面に
県通達は「文意篠篠心得姓名下ニ捺印ノ上刻
付ヲ以テ至急急々々相達可致候事」と同年4
月30日に発せられたものが、柴田医師の許へ
は5月4日午後3時花岡より到来、5日午後
佐伯へ送ると記されている。以上のことか
らみると県よりの通牒は警察署を通じて医務
取締へ、それより各医師へ再検の形で遍され
、各医師はこの通牒を筆書きしていたもので、
今昔の感深く、かつその苦労が察される。
その後本県においては明治15年、19年、24
年、28年、大正5年、6年、9年、昭和21年
（復員コレラ）があり、とくに明治19年は12
年に匹敵する大流行であった。死亡率も年々
度とも15%～66%と悲惨を極めたものといえ
よう。ことに検疫に関係したものも感染し、
次表の如く多数の犠牲者を出している。
また19年にも12年に劣らぬ大流行があり、
5月頃射水郡1名上新川郡2名の発生があり、
内務省は京都、大阪、兵庫の府1県をコレ
ラ流行地と限定し、同地からなる船船の入港
を伏せ、東岩魚津に限定し、県は防救官
を出して厳重な警戒に当たった。しかし6月2
日午前6時、今石動町に患者が発生し吐瀉2
回のあと同日午後1時死亡したと届出があ
明治十九年検疫関係者のコレラ病伝染状況

<table>
<thead>
<tr>
<th>区分</th>
<th>人よ</th>
<th>夫</th>
<th>看護婦</th>
<th>小使</th>
<th>予防委員</th>
<th>領民</th>
<th>町村吏</th>
<th>郡史</th>
<th>監察</th>
<th>警察官</th>
<th>県官</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>防疫従事者数</td>
<td>二十九</td>
<td>三七</td>
<td>三七</td>
<td>一〇</td>
<td>五六</td>
<td>三〇</td>
<td>二七</td>
<td>四二</td>
<td>二四</td>
<td>二一</td>
<td>二〇</td>
</tr>
<tr>
<td>同上中の患者</td>
<td>二〇</td>
<td>三〇</td>
<td>二六</td>
<td>二六</td>
<td>三五</td>
<td>二四</td>
<td>四三</td>
<td>二一</td>
<td>二〇</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
</tr>
<tr>
<td>同上死亡者</td>
<td>一九</td>
<td>二〇</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
<td>一九</td>
</tr>
<tr>
<td>全治者</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
<td>一一</td>
</tr>
</tbody>
</table>

石動署において念の為附近を調査する
と同様の患者9名あり、うち5名は死亡して
いた。この届出の遅れが事態の悪化を招いた
ものとしてろうばいした県当局はこの日に県
庁に防疫本部を設け、検疫委員15名を任命し、
検疫所や検疫派出所を各方面に設置して防疫
につとめたが、翌3日には甲第55号をもって
「県下石動郡今石動ニ於テ火列病発生、目
下発信ノ兆有ノ候条自今吐瀬ヲ兼症シヲハ下
網シタル患者ヲ診察シタルラ開師ヘ、直ニ警察
署ノ分署（檢疫支部設置ノ町村ハ該支部ヘ）
又ハ交番所ニ届出ベシ、違フモノハ違警罪ヲ
以テ論ジ、1日以上5日以下拘留、50銭以上
1円50銭以下ノ科料ニ処ス」と届出の励行
を厳達した。4日には今石動から他地への
古着、ボロ、紙くずの輸送を禁じ、また、た
こ、いか、かに、まる、ごしわ、たにそし
の他の消化不良の食物や過食について注意書
を発し、5日には今石動町のうち柳町、細屋
町を立ち入り禁止区域として、一切の交通を
遮断した。しかしこれらの措置も、はやての
ようなコレラの猛威の前に時すでに遅く、6
月7日富山市総港路に1名発生したのをきっかけ
に県下あまねく蔓延し11月20日までに患者
16,271名、死亡11,764名を算する大きな犠
牲を出した。患者の出ない村では道路に竹矢

来を組み、消防が昼夜張り番をして外部の人
間は入れず、患者の発生した市街地では家々
は表戸を閉して外を通る人の影もない状況で
あった。

また明治初期におけるコレラに対する恐怖
は甚しく、患者とみなされ予防の手だてを講
ずるよりもまず逃げ隠れることが多いが先だっ
たが、一面、衛生思想は低く、何故大正神のお洗米
を食べれば病にかからないとか、何々のみこ
とのお供水を飲めば治るなどの迷信が根強く
してかったです。そのため患者は統出しており、
一家がまくらを並べて死んで行くのや、路上
に倒れ避病舎に運ばれて、そのままどこに
とも知れず死ぬものなどの状況は悲惨を極め
た。見送る人もなく、棺だけ野辺に送られる
光景など随所に見られる、棺の中から「なんと
ひどいことを……」とつぶやく声や「助けけて
くれ」とわめく声が聞こえたというものもあり、
まさに残酷語といえる。

最近においては、昭和38、39、52、53、54
年に国内で発生しているが、これらのほとん
ど総ては海外旅行地においての感染持ちこ
いで、県内では昭和35年11月、フィリピン旅行
帰りの者から3名（永見1名、小矢部2名）の
患者発生を見たが、県厚生部の防疫体制の強
化と努力によって二次感染を未然に防止し
たのであり、以後県内に発生をみない。

以上明治初期における富山県のコレラ流行
の概要について述べたものであるが、この布
告、通達は西石動郡福岡町上奧に居住の柴田
弘之君から提供されたもので、同居の曾祖父
柴田富造氏が文久3年（1863）より同所にお
いて医業に従事され、明治初年の農村における
コレラ流行時の方針について記念された様
相がまざままと筆写された遺品より浮び上が
る。同家は富造氏の故郷が市伊勢城、これ
らの書類は歳中に保存され故蔵に忍びずとし
て、医学の面で何か役立てばと私に託され
たものである。私も弘之君の厚意を受けこた
に書き従った。
なお柴田富造氏は芦川村（現小矢部市）の
吉田玄亀につき漢法医学内治科を3ヶ年間修
業し、医術開業のためで、明治17年1月
1日大政官布告第35号による医師免許規則が
公布されたが、明治10年以降に医業に従事し
たものは医術開業試験を受けず届出のみにて
医師免許が与えられている（詳細はとやま県
医報 No850, 昭和58年3月1日号）。

明治初年、近代医学の黎明時の伝染病の蔓
延の実態を思い、農村地帯で医療に従事した
人々に思いをはせ、富山県医療史の一端とし
て記録に止めた。

欄筆するに当り、柴田弘之君（トラック島
防衛の戦友）の厚意に謝意を表し、また筆写
された書類の判読に厚生連秋元企画室長を煩
した、ここにその労を多とする。

参考文献
1）富山県警察本部：富山県警察史 昭和40年
2）富山新聞：越中の群像 コレラ流行 昭和57年2
月22日
3）富山県厚生部：永見・小矢部市で発生したコレラ
防除記録 昭和55年